

あした計画 I

生活特報部 FAX 092 (711) 9056 メール seikatsu@nishinippon-np.jp



放送作家
こやま くんどう
小山 薫堂さん

1964年、熊本県天草市生まれ。「料理の鉄人」「カノッサの屈辱」など担当。米アカデミー賞外国語映画賞「おくりびと」の脚本も。2009年から東北芸術工科大学教授。



女性起業家支援会社経営
すがはら ともみ
菅原 智美さん

1970年、新潟市生まれ。2007年、女性起業家の支援と貸会議室を運営するNATULUCK設立。全国で約500人が登録する女性経営者エメラルド倶楽部代表理事。

「女性が3割を超えたら、ぐんと活性化するというデータがある。経営者の3割超が女性になるようサポートしていきたい」

対談 現代の働き方

長引く不況で先が見えない時代。人々は新しい働き方をどう見つけ、どう生きていけばいいのか。テレビや著書で「仕事」について発言する放送作家の小山薫堂さんと、女性起業家の支援を続ける菅原智美さんが語り合った。

「仕事や働くことについて、日本の現状は？」

小山 「比較によって仕事を求める人が多い。『自分の仕事はあの人より良い』とか『昨年より売り上げが増えた』とか、判断基準が常に外にある。原因は、常に成長を求める社会にある。マイナスを評価する姿勢があれば社会は変わる」

菅原 「社員の不満は誰かと比べてどうかというのが大半。給料を上げてみればかより低かったら不満だし、逆に安い給料でも皆同じだったら満足する。原因として、夢や目標を持っていないことが挙げられる」

小山 「日本人は『ぶれる良のパスを出す判断をすることが求められている」

菅原 「民間調査会社のデータで女性経営者の割合が日本は6%。米国は25%、アジア各国も40%以上なので極端に少ない。子どもがいる女性が働きにくい状況

小山 「俺たちは幸せだ、という父の言葉が僕のベースにある。父は『戦国時代なら、働くとは人を刀で斬

菅原 「海外では日本人が経営しているだけでブランドになり得るので、中小企業のビジネスチャンスは正社員でなくては駄目と

小山 「神奈川のカフェのような店をつなぐチェーンをつくりたい。オーナーが違い、提供するものも違うが、思いだけは同じという『思いのチェーン店』をやりたいと考えている」

「ぶれる」生き方必要では 小山

経営者の3割超を女性に 菅原

「ことはいけないと見ているが、今はぶれないと生き残れない。軸足は今の仕事に置いて動かさず、もう片方の足は動かしながら最

小山 「行き詰まっている人は自分のことしか考えていない。打破する方法として、自分のことを差し置いて他人のことしか考えな

菅原 「新しいことにチャレンジするのが好きで起業した。感謝され、私と会って『人生が変わった』と言われるとやる気が湧いてくる。愛する人から感謝さ

小山 「シニア世代のことを僕はグラランド・ジェネレーションと呼んでいる。このグラフィエネがどれだけ上手に無駄遣いをするかが

か、ハードルを設けているからではないか。働く人を求める会社はたくさんあり、ハードルを設けなければ仕事は見つかるはず。何でもいから仕事をして、百パーセント本気で働いてみると、いろんなチャンスが生まれてくると思う」

小山 「今の学生は、確実にいいゴールが見えるところにならなくなっている。現代の日本に生まれたことに感謝する気持ちになれば、どこでもいから働こうという気になるのではないか」

小山 「今後やりたいことは。『誰かのために感謝する気持ちがあれば、どこでもいから働こうという気になるのではないか』

も相変わらず」
「日常から一歩踏み出す方法はあるか。」
菅原 「新しい人と話す」と新しい情報も入ってくる。セミナーや勉強会に参加して多くの人と会えば、やりたいことが見つかると思う」
小山 「現代に生まれても、いくらでもある。日本の優水をくむため毎朝の時間歩く国もあるんだぞ」とよく話していた。仕事で失敗しても戦国時代のように殺されないんだから、好きなことをやって人生を楽しもうという思いがある」
菅原 「新しいことにチャレンジするのが好きで起業した。感謝され、私と会って『人生が変わった』と言われるとやる気が湧いてくる。愛する人から感謝さ

